

# 桜とベンチと少年

と.....。



katasan1019

幼稚園の横にある公園に一本の桜の木があり満開だった。

ピンクの桜の花はあまりに咲きすぎて枝は隠されて重そうにしていた。

桜の色が似合うのは青空だけではない。

今日のようにグレーな曇り空にも迷いのある人の気持ちにも桜色は挿し色のように似合うような気がする。カラーセラピーの本で読んだことがある

『グレーという色は光りの色からの癒しを弱め、運気を下げてしまう色』だが『ピンクのように明るく澄んだ色は心を優しくし、温かく素直にする。そして魂や体全体を保護し人に優しく尽くすことができるようになる』らしいと。

だからか青い空よりも引き立ってその存在を鼓舞しているようにも思えた。

どんよりとしたその雲のおかげで桜の香りはいつもより低く辺りに立ち込めている。

公園に近づくに連れまちがうことなく進むことが出来た。

桜の木が視界にはいつてくると自然と早足になっていた。

私は公園の入り口にある古木らしい桜の木の下に潜り込み首を垂れた。

「あー癒されるー」

そうしていると首の後ろから桜のエネルギーが私へと注入されるような気がした。

私は靴を買いに出かけたのだった。

三年前に会社を退職してからフリーで文章を書いて仕事をしている。そのため収入は不定で年齢相応の収入とは程遠かったが、なんとかそれくらいのことではできていた。

けれど嫌いな買い物作業でずっと下を向いて気分が悪くなったのでこの日はあきらめた。そしてぼんやり歩き桜の香りに誘われてここまで来た。

首をもたげて満開の桜の花の数を数えてみる。

「咲かなくちゃ誰も注目してくれないんだ。葉桜の時は上なんて、見ないもんなあ。咲ける植物って私よりまだましか……」

と独り言を言いながら歩いていた。

この公園を通る人はこの桜の木の下を通らなければならない。

OL時代、桜の咲く頃会社では恒例の行事『花見』が毎年行われた。それから春は大嫌いになった。こうして嫌いだと思わなくなってから三度目の春になろうとしていた。

「なんで途中で帰ったんだ」

「用事があったからです。幹事さんには前もって報告してあります」

「会社の行事が優先だろ！ 途中で帰ったりするおまえが悪い！」

次の日私は会社で社長に呼びつけられよくこう怒鳴られた。

ここの上司には酒癖の悪い人が多かった。飲んで人にかからむことなんて当たり前のことで今でこそ『パワハラ』とか『セクハラ』という言葉で抑制されることもあるが、当時はまだそういう言葉さえ存在せず、ひたすら『泣き寝入り』だった。結局「お前が悪い！ 女のクセに！」との一点張りだった。さらに悪いのはそういう醜態を覚えていないことを言い訳として「酒の席のことだ！」といつもなにを言っても押し通してしまうことだった。「おまえも悪いが……」と言って くれていたら今こうしてはいなかったかもしれない。

呼びつけられるたびにそういつてもらえるかもしれないという期待は必ず毎回裏切られた。こ

の人はこの手の行事は自分で完璧に用意した。もちろん弁当の中身は自分で考え仕出し屋に注文をつけたもので、羊羹は臭いがるので弁当には入れないように。等々、それらの行為を褒め称えてほしいがためにいつも二次会まで全員出席が当然で風邪であろうがなかろうがいかなる理由も好しとしなかった。

けれど、お土産に用意された花見だんごが「二次会には邪魔！」と帰りしなにゴミ箱へと捨てられていた事実は知らない。怒鳴られている間私はいつも思っていた。

「こんなことは長く続かない……、続けちゃいけないんだ。」

と。そして、これから先、何のあてもつてもないままそこをとびだした。

あったのは「今までここで味わった以上の思いをすることは絶対はない！」というおかしい自信だった。

公園に私以外の人はいなかった。昨日の日曜日ここに来た時は若者達が桜の木の下で持参した弁当で花見をし、ベンチには家族連れが座っていた。今日は独占状態、それはそうだ。月曜日の午後二時過ぎ。昨日の若者たちなら学校へ、家族連れの親なら会社で働いている時間帯だ。こうして本当に自分が日中ぶらぶらしていることなんてOL時代は（一日中自由な感じってどんなだろう）と想像の世界でしかなかった。が今ここに私はこうしている。

桜の木はじつと木の下にいる私を見ていた。私は穏やかな気分で花を愛でることができると今に感謝し言った。

「私はもう大丈夫です」と……。

「やめなさいよ！ それっていじめじゃないの！」

「そうよそうよ」

女子達、特に川上さんが中心となって僕をかばってくれたんでその話はそれっきりになった。

けど僕は心の中で

「川上さん。そんなことを言っちゃうと本当にこの帽子は100円ショップで買ったものですよって決定したことになって僕はみじめだしあとでコイツをエスカレーターさせることになるかもしれないんだよ。黙ってくれればいいのに……。川上さんも100円ショップのモノだってわかったんだな……。」

と思いながら下を向いていた。

コイツが僕をからかったのは僕の帽子のことだ。

僕の帽子を指差して

「それってさあ。100円ショップのじゃないか？ どっかで見たことあるぞお」

と言ったことからほかの連中も「そうだそうだ」と始まった。

たしかにコイツの言うとおりこの帽子はおかあさんが100円ショップで買ったやつだ。

「新しい帽子よ。これ明日からかぶって行ってね」

「お母さんこれまた100円ショップのやつ？」

「そうだけど……嫌なの？」

「うーん。これじゃなくてキャラクターとかがついたやつの方が……」

「そんなことわからないわよお。どうせ学校に着いたら帽子なんてとるんだから」

「それはそうだけど……」

一学校に着くまでの間に100円とわかればさんざんからかわれるのに……。

って思った。僕の気持ちにはおかまいなしにお母さんは

「はいどうぞ」

と、新しくてうれしいでしょ、っていう気持ちを僕に押し付けるように帽子をかぶせた。

(新しいものでこんなにうれしくないものってあるものなんだな) ってことを昨日思い知った。明日もあさっても学校に行きたくなかった。

でも僕は次の日その嫌いだけど新しい帽子で学校に行った。

下を向いたって、上を向いたって同級生なら僕と大体同じ背だから帽子は目立つ。

(どうぞ誰にも気がつかれませんが……) と祈りながら知らん顔して歩いた。

その時「おはよう！」後から肩をポンと叩かれた。振り向くとコイツは立っていた。

「おはよう！」僕はいつもより明るく言った。

そして、僕の帽子に話がいかないように一生懸命話題を探し昨日見たテレビの話をした。

どきどきしたがその作戦は成功したようだった。

コイツが学校に着くまでのあいだ帽子のことは何も言わなかったからだ。

僕はほっとして席に着くとかぶっていた帽子をとった。

その途端に事件は起こった。

僕は結局一生懸命考えた作戦が失敗したことにがっかりした。

あの時、女子達が言ってくれたおかげで僕の帽子の話は本当に終わったみたいだった。

けど、僕のその事件をその時見ていたほかのやつらでやっぱり100円ショップの帽子をかぶっていたやつらはそっと帽子を丸めて机の中に隠したのを僕は見ている。

コイツの帽子は僕がずっと欲しいと思っていたキャラクターのついたやつだ。

コイツの家だって僕の家だってそんなに変わらない。

僕の家だってキャラクターの帽子を買えない訳じゃないはずだ。けどお母さんは

「子どもってすぐに大きくなるから買ったてならない……大変なのよねえ」

っていつも言ってる。

ついでに文句を言えば、僕の名前だって『一郎』だ。長男だかららしいけど、もっと気の利いた名前を考えられなかったのかとお父さん達の顔を見て思う。お父さんは

「メジャーリーグのマリナーズのイチローと同じだぞ」

て言うけど、自分は野球なんてしてないし僕と野球をしてくれたことだってない。

それで『イチロー』選手と同じ名前をつけられて、期待されても無理な話だと思う。

妹の名前は『まり』だ。僕が

「どうして長女なのに『一子(いちこ)』ってつけなかったの？」

ってお母さんに訊いたら

「女の子に『一子(いちこ)』はねえ……。かわいい名前にしたかったのよ」

だってさ。

一ふん。ついちゃったものは仕方ないけど納得いかない。

と、思った。

ちなみにアイツの名前は『翔』。両親が好きな顔も良くて頭もいいアイドルの名前でそんなふうになってほしくてつけたらしい。自分で誇らしげにしゃべってた。

僕のはみんな安い。100円ショップに限らず、Tシャツもパンツも靴だって安い。セール  
のやつばかりだ。

いつかの夜、僕が寝た後、夜、二人で話してたのを僕はそっと訊いてたことがある。

「お父さんの給料だって上らないし。残業代も出ない。でもお父さんだけじゃないしねえ。会社  
全体がそうなんでしょう？」

「そう。景気なんて全然良くないぞ。そんなの、何処の話だ、ってカンジだな」

「子ども達もまだ小さいから私がパートに出たって熱だケガだって何かあるたびに早退させても  
らう訳にもいかないし、託児所のあるところなんてここら辺にないし、今のままで踏ん張るし  
か ないわねえ」

「そうだなー」って言って。

二人が言うことはよくわかる。僕のクラスにも給食費払ってないやつだっているし。

先生はわからないようにしてるけど僕らはわかってる。ただ絶対に言わないだけだ。

いじめは絶対にいけないことなんだから。ただビミョーにからかう連中はいる。

「給食費払ってないやつなんてこのクラスにはいないよなあ」ってカンジにだ。

そういうやつらの言ってることは無視する。そうすれば黙る。そのうち言わなくなる。その話に乗ってはやし立てるからややこしくなるんだ。

僕の帽子が100円なのなんてそれに比べれば全然マシなことなんだけど。それでもやっぱりキャラクターの帽子は欲しい。絶対欲しい、みんなに自慢したいんじゃないのかぶりたいんだ。かぶって歩きたいんだ。

でも……、無理なんだ。来年のお年玉で買ったってその頃にはそのキャラクターは流行らなくなっているかもしれないしお年玉ってものはそんなものに使うもんじゃないような気がする。

帽子や着る物や食べる物なんて親が子どもに用意するものなんじゃないのかな。

大きくなって自分で稼げるようにでもなれば自分で好きなものを買えるけど、子どものうちは親が揃えるものなんだ、って、川上さんも言った。

他の子のお年玉の使い道はゲームとか買ったりしてるし、僕もそのために貯めてる。

その日一日、僕は落ち込んだ。大好きな給食も体育も音楽も楽しくなかった。

もちろんそんな態度は見せなかった。いつもと同じようにしていた。

帰り支度をしていたとき別の子、割とよく一緒に帰るヤツから

「気にするなよ」

と言われた。

「うん。わかってる大丈夫だよ」

って僕は応えたんだ。

「一緒に帰ろう」って言われたけど今日は一人で帰りたかったから「今日は急いで帰らなくちゃいけないんだ」ってうそをついた。わかってくれたようだった。

用事なんてなにもないけど、一人になりたかった。うんと遠回りしてから帰りたかった。

全然知らない道を通ってうんとうんと時間をかけて道に迷っちゃったんじゃないだろうかと思うくらいにして家に着きたかった。

校門を出て右に曲がることにした。僕の家に戻るなら左に曲がらなくちゃいけない。

お母さんにいつも言われている

（道草しないで帰ってくるのよ。知らない人に呼ばれても返事しないように。防犯用のベルは手に握っていること。それから……）っていうたくさんの「してはいけないこと」の全部を僕は順番に思い出していった。

右に曲がったってそのうち家には帰れるはずだと信じた。

慣れない道を歩くことは僕をどきどきわくわくさせてくれたから、今日起こったイヤなことを思い出さなくてすみそうだった。

少し歩いたコンビニの前で運悪く保健室の先生が店から出てきて僕に声を掛けた。

「あれえ、君、三年五組のイチロー君じゃない？」

「……はい。そうです」

「どこ行くの？」

「家に帰るところです……」

「あれ？ 君の家ってこっちだっけ？」

と僕が今歩いてきた道を見て言った。

「……ちがうけど」

「おやー？ 道草はいけないわよ。危ないし、今日はお迎えしないの？」

「はい。先生。どうして僕のこと知ってるの？」

「ああ、君の担任の先生がね、ウチのクラスにはマリナーズのイチローと同じ名前の『一郎』がいるんです。期待の星なんです、って職員室でいつもおっしゃってるのよ」

「ふーん、期待の星か、僕、野球とか別になにもしてないし、成績も普通だし……」

「今日学校でなにかあったの？」

「別に、今日は一人で帰りたいだけです」

先生は体を反らしてけらけら笑いだした。そのたびに先生が持っているコンビニの袋は僕の目の前でぶんぶん揺れて僕にぶつかりそうになった。

「いちろうくん。おもしろいわねえ、疲れたOLさんみたいなこと言うのね」

「おもしろい？ そうですか？」

—小学生だって疲れることくらいあるよ。

と僕は思った。

「これから保健室来ない？ 少しお話していかない？」

「いや、帰る」

「……そう？ じゃあ、こっちじゃ方向違うわね。君の家はあっち」

と言うと先生は僕の体を正しい道の方に方向転換させた。

「いいわね！ 大丈夫ね！ 一人で帰れるわね！」

とかがんで僕目を見てしつこいくらいに念を押した。

僕は仕方がないので「大丈夫です」って応えた。

こうして僕は『遠回り計画』をあっけなくあきらめさせられた。

僕はもう一度校門の前まで先生と戻って来た。

先生はまた

「大丈夫ね！ じゃあまた、明日学校でね」

って手を振って学校の中へ入っていった。

「あーあ、失敗だ、つまんないの、仕方ないやいつもの道帰るか……」

同じクラスのやつらはグラウンドで遊んでいた。それを見てもやっぱり今日は一緒に遊ぶ気にはならなかった。

いつもの道ならお母さんに言われていた、してはいけないこと、を思い出す必要もないので忘れた。

大きくて賑やかな道を通り交差点を渡り、左に曲がり、右に曲がる。

そのまままっすぐ歩くと幼稚園がある。この幼稚園はお父さん達が、まりちゃんが大きくなったら入れる、って言う計画をたてている幼稚園だ。

ここに越してくる前にお父さんとお母さんが話し合っていたことがある。

「お兄ちゃんの学校にもそんなに遠くないし、ここの幼稚園は私立だけど、家から近いならお迎えのバス代もかからないから、市立に入れなかったらここにしよう」って言ってて、だからこの近くに引越したんだ。

だけど、その時はまだ、まりちゃんは生まれていなくてお母さんのお腹の中にいたんだ。

なのに、女の子だってこともわかっていたし名前も『まり』って決まっていた。

僕の名前が平凡だったから考え直したのかも知れない。

僕は今三年生。ここへは二年生の春に越してきた。

幼稚園の隣にある公園の桜がたくさん咲いていたのは覚えている。

「イチくん。桜の花きれいだねえ」

ってお父さんが言った。

「桜？ どこ？」

ってお母さんは訊いた。

「あそこにあるよ。桜の木だよ」

「僕、こんなにたくさんのお花初めて見た」

「初めてじゃないさ。去年だって見たよ。ここのじゃないから覚えてないかー」

「うん」

「一歳じゃあ覚えてないかなあ」

「見たような気もするけどこんなに咲いてた？」

「そういえば、こんなにびっしり花がついてる木って珍しいかもしれないな。これ枝見えないもんなあ」

そう言ってお父さんは背伸びをして枝を探した。

僕はお母さんに見せてあげようと思って落っこちている花をたくさん集めた。

あの時も春だったけど今もやっぱり春だからこの桜は毎日いっぱい花を咲かせている。僕はその公園の木の下を歩いて毎日学校に行っている。

いつも通りこのまま歩いて行ったらうちへはすぐについてしまう。

この角を曲がればもうすぐ桜の公園は見えてくる。

公園には木でできたペンキのはげかたベンチがある。

「まっすぐ帰りたくないからベンチに座ってようかなあ」

お父さんとここへ来た時は必ず座る。そしてアイスを食べたりジュースを飲んだりして周りを見て過す。

でも、やっぱり野球はしない。お父さんは本当に得意じゃないらしい。

僕が滑り台やブランコで遊んでいるのを見ているだけだ。僕はお父さんに言ったことがある。

「ねえ、キャッチボールしようよ」

「ええっ！ キャッチボール？ そうだよなあ。男の子だもんなあ。お父さんあんまり得意じゃないんだけど。グローブとか持ってないし。うーん。わかった！ じゃあ今度、今度ボールとか買っておくよ」

そういったけど最初にそう訊いたときからずいぶん日にちは経っている気がする。

道具なんて全然そろってない。

—よっぽどしたくないんだろうな。

て、思ったから僕はそれからその話はしない。ただ

—だったら『いちろう』なんて名前つけなきゃよかったのに……キャッチボールもできないイチローなんてカッコ悪いなあ。

って思い続けているだけだ。

公園が見えてくると桜の木の下に女の人が一人で立っていた。

うれしそうにニコニコして桜の木を見上げていた。

—頭、おっかしい人かな？

って思った。だから通り過ぎてみた。

だけど気になったからベンチに座ってその人を見ることにした。追いかけてきたりして危なくなったら走って逃げればいだけだ。

その人はずーっと桜の木の下にいた。ほんとうにうれしそうに上ばかりを見ていた。

いくつなんだろう。うちのお母さんと同じくらいかな。

その人は僕に気がつかないのか全然僕のほうを見なかった。

僕はどうしてだかわかんないけど自然とその人のいる桜の木の下に向かって歩き出した。

私は、雪解けで汚れたベンチにさっき私の横を通り過ぎた男の子が一人で座っているのはわかっていた。

じつとこっちを……私を見ているのもわかっていた。背を向けていてもその視線がジンジンと背中に突き刺さっていた。

私が右に動けば右を見、左に動けばそっちの方向を見ていた。気にしないようにした。

小学二年生くらいだろうか……。誰かを待っているにしてはちょっと暗い感じがした。

その男の子はベンチから降りると歩いてきた。私に向かって歩いてきた。私は背中を向け続け—どうか私ではありませんように……。

と祈った。

けれどその祈りも虚しく男の子は私の横にぴたりと並んだ。あまりの近さに飛びのかんばかりに驚いた。

男の子の体温が感じられ、桜の香りが染み付いてた私の鼻は、また、いつもの現実世界に引戻されたような気がした。

—何、何？

その男の子は自分の帽子を指差し言った。

「これ、100円なんだよね」

「は？」

確かに男の子の年齢にしては地味な感じだったが言われなければそんなことは私にはわからない。

何か言った方がいいかと思い言葉を探した。「そうは見えないよ、似合ってるけど」と言えば（自分には100円の物しか似合わない）と、この子に思わせてしまうかもしれない。一体この子は私にどんな言葉を期待して近寄ってきたのだろうか。

私の頭の中はすっかり真っ白、パニックになった。そして  
「……そうなんだ」という言葉しか浮かず、それでこの場が済んで「帰ってくれますように」と  
願った。

効き目があったのか男の子はベンチに向かって歩き出した。

一諦めてくれたのか……。

と思った。そして立ち止まると振り向いて。

「ねえ。ベンチに座ろうよ！」

と私に向かって叫んだ。

「はあ？」

—「ベンチに座ろう……」って、見ず知らずでしかも何処から見ても頼りにならないこんな大人に一体何の用なのか、新手のナンパのテクニックのような気がした。

と思いながらも雪解けでたつぷりと水分を含んだ芝生の上をノコノコとベンチに向かい男の子の隣に座った。

どう見ても小学三年生か四年生くらい。それで「ベンチに座ろうよ」などと大人を誘う。一今の子って……。みんなこんな風に物おじしないのだろうか。

と思った。

男の子がベンチに深く腰掛けた姿を見ると足が地面に届いていなかった。

並んで座ってはみたがどちらも黙ったままだったのでまだ男の子が期待する交流は成り立たっていなかった。

—こういう時は大人の私から口火を切らないと……。でもどう言えば……。

とあせりまくった。

(大人の代表としてこの子の要求には応えてやりたいが口下手でコミュニケーションをとるのが下手でそれ故に会社を辞めた私にどうやってこんな小さな子どもと話せというのか何を話したいのかそのきっかけをいつ切り出したらよいものか)と思案した。

すると、業を煮やしたのか男の子は

「100円ショップのだよ！ うちのお母さん僕のは100円ショップで買うんだ」

と横を向き私の目を真っ直ぐに見て、叩きつけるように言った。

昨今の100円ショップにはほんとうにたくさんの衣料品・雑貨で溢れている。

現に私が今、履いているソックスもこの男の子の帽子と同じ店のもので100円だ。

この子の家庭の経済事情によりそうしているのだろう。そして親もそれで「十分だ」とまさか子どもがそんなことに不満を持っていることなど露ほども知らずに購入しているのだろう。どうやらこの子はそれが気に入らないらしい。話はなんとなく見えてきた。

「100円ショップじゃ嫌なの？」

「川上さんがかばってくれたんだ」

「はあ？ か、川上さん？」

「僕と同じクラスの川上さんが「その帽子100円ショップのだろ、ってアイツにからかわれてた僕を「やめなさいよ！」ってかばってくれたんだ」

「いい子じゃないの。よかったんじゃないの？」

「どうしてさ？」

と私をキッと見た。

—「どうしてさ」って私に言われても……。

小さいながら怒った顔のその迫力にびくっとした。

—なんだって初めて会った子どもに睨まれなければならないのだろう。OL時代も散々上司に睨まれてきたようやくそれも終わることができたというのに今また……。

と思いながらも「冷静に冷静に」と自分をなだめた。

「だってそのままだとずっとからかわれ続けたかもしれないんだよ。助かったでしょ？」

と川上さんの行動の正当化を説明したつもりだった。

「……でも、すんごく恥ずかしかった。だって逆に言えば川上さんは僕の帽子が100円だってことを決定的にしたんだよ」

「そうかなあ。でも『100円ショップの』ってわかる？ 私は言われてもわからないけど」と、男の子の帽子をよくじっくりと見た。

「絶対そうだよ！ 女の子はファッションにはうるさいんだ。だからあの店にも僕のクラスの女の子はたくさん行っている。どんなものがあるかってことも知ってるさ。この帽子が売ってることも知ってたんだ。絶対だ！」

面倒なことになってきた。そう言われればそうだが……。`絶対！、という信念にも似た言葉を自分に貼り付けている人にそれを翻させることは不可能に等しい。とOL時代の経験により心得ていた。

だが一方で、こんな小さい子にも『プライド』があるものなのかと感心させられもした。時代はどんどん進んでいるということだろうか。

「でもさあ、『川上さん』ていうんだっけ？ 「僕の帽子100円だって知ってた？」 ってはっきり訊いたわけじゃないんでしょう？ あくまでも君の推測なんじゃない？ そうなんじゃないかっていう。川上さんて正義感が強いだけなんじゃないの。もしくは君のことが好きなのかもしれないよ。『正義感』ってわかる？」

「知らない。けど。そんなこと訊けるわけじゃないじゃん」

「正しいことを正しいって導いてはっきり言っちゃうことっていうかそうする気持ちってところかな」

「ああ。いつもそんな感じに行動する子だ。女子の中ではリーダーなんだ」

真っ赤になって笑ってくれるかと思ったのにこのかわいくも『小さな敵』は無表情で真剣そのもの地面に届かない足をぶらぶらさせてこんなことを言う。

「`リーダーなんだ、か……なるほどね」

「でももし僕のことが好きだったらさあ。かえって何も言えなくない？」

と言い私の顔を覗き込んだ。

どきっとした。そのとおりだ。確かに何もできない。私ならだれかが助け舟を出してくれるのをスカートをぎゅっと握りおろおろしながら待つだろう。

私は一体誰と話しているんだろう。声変わりこそしていないが。まるで大人の会話だ。

「この子って一体どんな育ち方をしているんだろう……。」

と横顔をまじまじと見た。けれど肌はつるつるで白い産毛が曇り空でも光り、まぎれもなく子どもの`体(てい)、を示し、草のような新鮮な『肉』のような子ども特有の匂いがした。

「きっと私とは違ってこうしてただ座っているだけでも細胞は刻々と増殖し体のあちこちも活発に成長しているんだろうな。と思った。」

そこいら辺によくいる大人の人工的に造られた『ムスク』だ『シトラス』だとか、今、大流行している『フェロモン』配合のもので体にスプレーすると女性がくらくらっとするやつなんかではない。けれどそのスプレーも全女性に効果があるというわけではなさそうだった。現に私は

試供 品を嗅いでみたがまったく何も体や感情のどこにも変化がなかった。私がおかしいのかその効力 が弱っていたのかはわからないが……。

大人の私がここで負けてはいけない。

「ふーん。てことは君は言えないんだ」

ここで、はじめてこの子はほんの少し赤くなったように見えた。

「まあそうかもね。でもそれって普通じゃない？」

この応えでさっきの見えた感じは帳消しだった。

時々見る桜の木は私たちのちぐはぐな会話を体をよじって笑うかのように枝を揺らし花びらを風 に散らしていた。

「桜の花きれいだね」

うつむいていることの多いこの子に前を向かせるために言ってみた。

男の子はようやく顔を上げ、私の言った意味を理解してくれたようだった。

「うん。そうだね。あのさあ、ずっと木の下にいたよね。なんで？ 何してたの？」

「だってきれいでしょー。もうすぐ全部落ちちゃうんだよ。その前に覚えておきたくない？ きれいなままのところをさあ」

「だけどここの桜なんてきつと来年も咲くよ」

とあくまで冷静だった。

「来年咲くかどうかは誰にもわからない！ のだよお」と言ってみた。

私はこの子の「えー、どうして？」と言ってくれるのを期待していた、しかし、

「でも、咲く確立の方が高いと思う。問題はそれを見るために自分が来年ここに来られるかどうか かってことだよねえ」

私の体のどこから出たのかわからない汗でひやっとなった。訊かれたら応えようと思っていたことをずばり言われてしまった。その通りだ。私はすっかり力が抜けて背もたれに寄りかかった。(人として負けているんじゃないのか) という気にさえなった。

「ああいうの好きじゃない？ 興味ない？ 花とか鳥とか犬とか猫とか蝶を追っかけたりとか虫を 採ったりとかはどう？ あっ！ ほら！ 見て見て！ 飛行機飛んでるう！」

と曇り空を避けるように飛んでいる飛行機を子どものように指差した。

その行為で男の子の子どもとしての感覚を呼び覚ます。そして、「ほんとだ！」という感嘆を共有できるのでは、と思った。

が、男の子は空を見上げただけで特別に表情が変わることはなかった。

「お姉さんって飛行機好きなの？ 僕、あんまりよく見たことないからわかんないや。それより地 下鉄の方が面白いと思う」

「飛行機乗ったことないの？」

「あるさ。だけど、飛行機って建物と廊下でつながってるよねえ。長ーい廊下で。だからあんまりわかんない」

—この子の言うとおりの。今は建物に連結していたんだ。昔みたいに飛行機までとことこ歩いて乗る、もしくはバスでその附近まで行ってからタラップで……。なんてめんどうなことはなくな ったんだった。

ということに気がついた。

「今に乗れるよ。最近の修学旅行って『東京ディズニーランド』や『ディズニーシー』に行くって いうしね」

「お姉さん？ 『東京の』じゃないよ」

「じゃあどこよ」

「本物のだよ」

「本物って……外国の？」

「そうだよ。あと『ハワイ』とか『韓国』とかだよ」

「ハ、ハワイ？」

—私のOL時代は有給も取りづらい職場環境にあったのでこの齢まで外国に行ったという経験がなかった。

(このままの生活だと一生ないかもしれない) とさえ感じているところだ。

「そんなに飛行機に乗れる回数多いんなら。今はまだ地下鉄の方がおもしろいかもね。地下鉄ってあれでしょ？ 一番前の車輻のところから運転席が見えて走ってるところを見るってことでしょ う？」

「そう。それにさあ虫取りって言ってもお、まあ別に興味がなくはない。けどそういうの一緒に やってくれる人が少ない。ここの公園は違うけど、`うるさいから、`ってボール遊びをやっちゃ いけないって公園の方が多いんだ、今は、蝶だって虫だってここら辺にいる？ だからあんまり 知らない」

—そういえば、昨今の公園は立て看板が多い `イヌは放すな、` `花火はいけない、` `自転車で山に 上るな、`だ。`芝生で焼肉をするな、`なんてのもその季節になるとあったりする。

「友達は？ 近所にはあんまりいないの？」

「いなくはない。でも塾とか習い事に忙しそうで、時間が合わないんだ。学校のグラウンドで遊んでても遅くなると帰り道に気を使わなくちゃいけないからそれも面倒だしね」

「ああ。なるほどね。そうだねえそういう御時世だねえ。だったら君も塾とか行ったら？ そこで 友達できるんじゃない？ 塾でも夏はキャンプとか海の家とか行くんじゃないの？」

男の子は `この人馬鹿じゃないの、` という目つきで

「『塾』だよお？ そんなことしないよ。ただ勉強ばっかさせるだけだよ。『ゆとり教育のひずみ』ってのに僕たちは入っているらしいんだ」

「『教育のひずみ』？ 意味知ってるの？」

「知らない『林君』がそう言った。`新聞に書いてあった、`って」

「へーえ『林君』はずいぶんと物識りだねえ」

「クラスで一番成績いいんだ。漢字もたくさん読める」

「ふーん。そりゃすごい」

—子ども達ってこうやって大人たちの情報をかいつまんで理解した気になって頭ばかり大きくなっていくんだろう。

昔の子どものように遊び呆けていればすんだ時代とは大違い、考えることが多すぎる。

「大人はいいよね……」

「なんで？」

「こんなところでこんな時間に『桜の花がきれい……』って歩いてても保健室の先生とかになにも言われないで好きなところ歩けるし。自分のお金で好きなものを買えるし……小学校なんて六年もあるんだよ。僕はまだ三年しかたってない」

赤面した。穴があったら入りたかった。

—この子は三年生か……。

今度は保健室の先生が登場した。そして大人を嘲笑気味に褒め始める。まるで営業成績の良い営業マンのようだ。

「いいのかなあ。でも、逆に言えば皆が働いている時間にこんなところでこんなことをしてれば怪しいやつだと人には思われる確立は高い気がする。現に君は私に『何してるの？』って訊いたよね。子どもがそう思うなら普通の大人ならもっとそう思うはずだし……」

「そっか……」

「君なら道草食って保健室の先生に言われるくらいで済んだかもしれないけど、私ならヘタしたら警察に職務質問とかされかねない。これでも結構気を使って歩いてるんだけど。そんなにうれしそうに顔してた？ 変だった？」

「『変』ってというか。あんなうれしそうに顔している大人って僕のお父さんが妹のまりちゃんをあやしている時にするくらいだと思ってた」

—家族構成が若干判明した。妹と両親らしい。

自分がそのときどんな顔していたのか大体想像できてはいたが、第三者からみるとかなりにやけていたことがわかった。

そして、この子は「もっと遊びたい、らしいということもわかった。

「お父さんとはキャッチボールとかしないの？」

「あんまり得意じゃないんだ、って言ってた」

「ふーん」

と言っではみたが、得意だとか不得意だとかってことじゃなくて父親って男の子とキャッチボールができることを男の子が産まれたことの楽しみの一つとしているのではなかったか？ この考 えももう時代遅れなのだろうか。

「だったらさ。もっとしつこく何度も言ってみたら？ 「お父さんが得意じゃなくても僕はお父さんとキャッチボールしたいんだ、ってさ。そこで引き下がるからいつまでもできないんだよ。そ りゃたいしたことではないけど。キャッチボールって結構楽しいよ。私も子供の頃、父親とキャッチボールしたよ。今でもはっきり覚えてるけど」

「へえー、そうなんだ」

「そうだよ。言ってみなさいよ。したいんでしょ？」

「うん。だって僕の名前『いちろう』って言うんだ。あのイチロー選手と同じなんだよ。ああい う 風になってほしいってことでつけたくせに「キャッチボールは得意じゃない、っておかしくな い？」

「なるほど。勝手にうまくなれ！ ってことかまあそれは矛盾してるかもね」

「そうだよね。ああなれないならメチャクチャ平凡な名前だよ」

「で、上の名前は？」

「苗字のこと？」

—『苗字』っていう言葉がわかっているならさっさとそう言えばいいものを……。わざわざ子 ど もに解り易く言ってやったのに……。

と知っている。

「『松下』だよ」と嫌そうに言った。

「『松下いちろう』君？ いいじゃないの偉い社長さんか俳優さんみたいだよ。それでも嫌なの？」

「そおう？」

「そうだよ。偉い社長さんで『松下こうのすけ』っていう名前の人がいたんだよ」

「だって『こうのすけ』でしょ？ それならカッコいいじゃん！」

「そっか……。別に『いちろう』っていいと思うけどねえ……」

—どこまでもこだわる男の子の名前は漢字で「一郎、いう字だと土に書いてくれた。本当に普通の名前だ。この子の両親ならまだ若いだろう。本音を言えばもう一ひねり欲しかったところだが、誰にでもすぐに覚えてもらえる名前ではある。

「でもさあ。アイドルみたいな名前付けてそうならなかった、というかそんなスタイルじゃないっ て人もたくさんいるしねえ。そういうのを『名前負け』って言うんだよ」

「僕がそうじゃん」

「『負けた』っていうほど君は人生生きてはいけませんよ！」

「絶対？」

「絶対に！」

「絶対絶対絶対に？」

「以外にがんばるねえ。絶対にです、ってば！」

たしかに一絶対である。とは言い切れないが今、この場では使わざるを得ない気がした。

「そうかな……」

「だいたい君はそうしたいことになんとかしようとしてみるってことをしてないでしょ？ まだ……何もしないで自分のしたいことが思うように叶うことなんてないんだよ。だからやってみたら？」

私は自分自身の今に言い聞かせているような気がした。

「そうかな……。そうすれば叶うの？」

「……それが、そうでもないんだけどねえ。だけど大人になって一あの時ああしていれば……。なんてごちゃごちゃ言うより君みたいに早く気がついたときから始めてそうするクセをつけたほうが断然いい！ って思うんだけどなあ」

と次第に尻すぼみとなる語尾に自分が情けなかった。

「お姉さんはそうできなかったわけ？ ずいぶん力が入ってるけど」

「……」

「痛いところ突いてたりして」

とにやつとされた。

—この子はジキルとハイドか。

と思った。

「君ぐらいの知恵があれば私もこんなに苦労しなかったのにねえ。毎日やみくもに生きてきた気がする」

「今反省してるの？」

「うん、まあそんなところ……」

「大人も大変なんだね。うちもかなあ。だから僕の物も100円ショップで済まされるのかなあ」

「たぶんそうだよ。毎日学校に行ってさえすれば済む生活なんて今思えば夢のような生活だよ。私の中学生生活なんてそれはそれは楽しくて卒業したくなかったもん。でもその時って気がつかないんだよ」

「僕もそうなるかなあ」

「中学まで待たなくてこれからすぐに楽しくなるって！ 勉強が楽しくなるかどうかかわらないけどそれなりに役に立つもんだよ。考え方とか、考えなくちゃいけない姿勢とか、じっと座って授業を聞いていることだって大事な訓練なんだよ。でもってそれって以外に難しいことなんだってこととかわかるし……。これからも『少子化』は続くから高校だって大学だって私の頃よりかは絶対に入りやすくなるはず。私たちの頃って三倍四倍なんてあたりまえだったんだよ。まあどっちにしても勉強しなくちゃ入れないことには変わりはないんだけどね」

男の子はベンチの背もたれに寄りかかって私の話を訊いていたがゆっくり言った。

「それってあの桜が何回咲くことになるんだろうね」

一人がありったけの記憶と経験に基づく知識で熱弁をふるっているというのにこの子はなんと冷めたことか。私は紅潮して熱くなった顔のまま

「何回でも見られるようにするんだよ。自分でさ。」

「ふーん」

一本当に手ごたえの薄い子どもだ。近頃の学校の先生ってこんな子を相手にしているのだろうか。だとしたら全く大変な職業だ。こんな冷めた視線を背中に浴びながら黒板に字とか書いているのだ。先生ったら熱くなってるし……、なんて頬杖つきながら眺めているんだろうし。昨今 先生のなり手が少ないというのも納得できる。

と思っていた。これ以上の説得は無駄と思い私は話題を変えた。

「……で、どういう帽子がよかったわけ？」

「キャラクターのついたやつ」

「今、学校ではそういうのが流行ってるの？」

「そう」

「ふーんそれは高いの？」

「百円じゃ買えない」

「そういえば、私もそんなことあったなあ」

「あった？」

「うん。あの時は『木綿の靴下』が流行ってたんだよね。確か」

「『木綿』て？」

「コットン。わかるかなあ。えーと、バスタオルの生地で、厚いからちょっとごわごわして履きづらいんだけど。すんごく流行ってたの。それが欲しくてねえ。母親に頼んだけど、今の方が履きやすいから、って買ってくれなかった」

「で？ どうしたの？」

「それでも欲しかったから自分のお小遣いで買った」

「自分で？ どうだった？」

「それがすんごく履きづらかったんだ。固くて伸びなくてさ。だから母親は、ダメ、って言ったんだよね。それがわからなくて。でも履いてみてわかったから別に後悔はしなかったけど」

「ふーん。お母さんの言ったことが正しかったって訳だ」

「そう。今でもあの履きづらさはハッキリと覚えてる。それから必ず『化繊』の混じってるものを 買うようにしたんだよねえ」

男の子は頭の後ろで手を組みながら

「まあ貴重な経験だとは思いますが、そういうのって親が揃えてくれるもんなんじゃないの？ 靴下とか帽子なんてさ。自分で買うかなあ」

「貴重な経験だと！ また生意気なことを言う。」

こうなれば私の親の面目のためにも私は気を取り直して言わなければならない。

「まあ、そうだけど、どうしても自分で確かめたかったの。それで納得できるならお小遣いを使うのも別に嫌じゃなかったし、結果はどうでも一応欲しいものは手に入ったわけだし、人がし

てく れることばかり待ってても駄目な時ってあるんだよね」

「そうかなあ」

「靴下はその後親に見つかっているいろいろ訊かれて『ほらみなさいお母さんの言ったとおりでしょ、 なーんて言われて悔しい思いもしたけど……。でも、よその親って（センスいいなあ）って思う ことのほうが多かった気がする」

「僕もそう思うよ」

ここでようやく私たちは気が合い。ほっと一息ついた。

「でも、そんな

キャラクターのかぶってきたら『なまいきだ、なんていわれてかえっていじめられたりしない？』

「今『イジメ』には相当敏感だから大丈夫なんだ」

「『敏感……』って」

「うん。すぐに原因の調査が始まるんだ」

「じゃあさ、どっちにしてもからかわれるじゃん」

「え？ なにそれ、どういうこと？」

「そうだよ！ きっと川上さんも『浦島太郎的』な感じで君に助け舟を出したんだよ。先生とかの ところに呼ばれたり喧嘩になったりする前にさ」

「浦島太郎？」

「そう。あれって確かいじめられてたカメを助けたんだよね」

「『カメ』って僕のこと？」

「そう！ そのときのシチュエーションでは君」

「なにエーション？」

「シチュエーション。状況ってこと。だから君は川上さんに『さっきはありがとう、って言わなきゃいけないんだよ。言った？』

「いや。言わなかった」

「黙ってたの？」

「うん」

「そっか……。恥ずかしかつたからしかたないか」

「うん」

「でも、言っといたほうがいいよ。いいと思うよ」

「……」

「こっそりと。廊下とかですれ違った瞬間とかにさ」

と私はやってみせた。

「えー。かっこ悪っ」

「『かっこ』の問題じゃなくてさ『人、としてっていうか『男として、って感じでき』

「『男として』ってことか、だったらありか……」

「でしょ？」

—こんなに小さくても『男として』という本能はあるんだ。ようやくここまできて歩み寄ってくれた。と思った。

一体いま何時なんだろう。携帯はカバンに入っているがそれを取り出したりしたらこの勘の鋭い子のこと（この人帰りがっている。僕と話すの嫌なのかな）なんて思って（もういいよ）なんて中途半端で終わってしまう気がした。そうなれば私も心残りだ。ある程度の手応えがほしいところだ。

「それにさあ。100円ショップ生活ってまだまだ続くと思うよ」

—というと男の子はハツとしたようだった。

「そうだよ。続くよねえ……」

と諦め顔になった。

「そうだよ。そりゃキャラクターのほうがいいしうれしいさ。お母さんだって子どもの時があったんだから解ってると思うよ、だけど、そうしてあげられないんじゃないの？ 君はどんどん大きくなるし。妹のまりちゃんだって大きくなるし。景気は悪いし……。仕事は無いし……」

「お姉さん。仕事無いの？」

「まあ、そんなときもある……」

「ふーん。それは大変だねえ。で、何してる人？」

と、話は急展開した。

「はい？ そのお。フリーで文章書いている……」

「フリーって？ 会社じゃなくて？ 文章って？ 作文？」

「……そう」

「わかった！ 本とか書く人だ『作家』だ」

「『作家』って知ってる？」

「いや。学校ではまだ習ってないから知らないけどお父さんが『こんな本出すのが作家なら俺でもできる、って言ってたことある。』」

「ふーんそうなんだ」

「どんなの書いているの？ 昔話？ ハリーポッターみたいやつ？」

—ハリーポッターとは……この子はときどき子どもの顔を覗かせる。

—と思った。

「そのお、どんなのっていろいろだけどまだ、そうなれてる訳じゃないし、書き始めて二年経ってないし……」

「そうなんだ。まだなっていないんだ。じゃあさ、僕が作家っていうのがどんなもんかってことが解る頃にはお姉さんの本って本屋さんにあって読めるのかなあ」

「うーん。解らないけど、君が大きくなるのって早いよねきっと……」

「なんだか頼りないなあ。それで大丈夫なの？」

(ただいま『暗中模索』な状態です)とも言えず、さっぱり子どもの手本にならない自分が不甲斐なくただうつむいて地面を靴の先で蹴っていた。

「僕、お姉さんみたいな大人見たことないや。大人ってもっと強いのかと思ってた」

「私は『例外』な気がする。君の周りの大人が普通なんだよ。でも私も昔というか前まではそうだった。それに疲れて方向転換したの」

「へえー。出来るんだ。僕の今日の道草みたいなもんだ」

「道草ではないんだけど、いや前が道草で今やってることは道草ってことじゃないの。じゃなくてどっちも道草じゃないんだけど……」

「なに言ってるの？ 子どもにはわかんないんだけど」

一人をここまで混乱させておいて急に自分を「子ども、だと主張する！ だんだんむかついてきた。

「だから人生に道草はないんです！ そう見えることでもそれなりの経験となって有意義なんだったこと！」

「逆切れしたの？」

「……別に」

「まあいいや。お姉さんの書いた本がお店に並んだらすぐ読めるように、僕はたくさん漢字を覚えておくよ」

「その時はお願いします」

と頭を下げた。

私たちは大人だの子どもだのと隔たることなく対等な立場で話していた。

というより私は逆転しているような気さえした。

私は続けた。

「まあね。でもね。何を着てたってどんなものを履いてたって自分でやりたいことがあるならやらなきゃいけないんだよ。私はリセットするのには遅すぎだけど、やっぱりやってみてよかったと思ってるし「絶対になんとかなる、って思ってるし」

「そっか。『考え方』ってことなのかなあ」

「その通り。だから君はもっとしたいことや欲しい物があるならお父さんやお母さんに言ったほうがいい。それが通らなくてもさ。一人で煮詰まるのはつらくない？」

「大変な時はあるけど」

とその時どこからか

「いちろう？ お兄ちゃん！」

と叫ぶ声が公園中に響いた。その声に、呼ばれた本人より私のほうが驚き、二人同時に振り向いた。

「あっ。お母さんだ。ここだよー」

と男の子は母親らしき人に手を振った。

男の子の母親は帰りが遅い息子を心配してそこいら辺を歩いていたらしい。

私は母親を迎え入れるように立ち上がった。

二人がベンチに座っている姿は母親から見れば、特に昨今の多発している犯罪状況から判断しても（おかしい）と思ったことだっただろう。

母親は背中に妹を背負ったまま男の子の元に全力で駆けて来た。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃん！ なにしてたの？」

と叱責するような安堵したような声で男の無事を確認すると、案の定私に怪訝そうな視線を投げかけた。私よりかなり若い母親だ。三十なりたてにも見えた。

「この子はきっと叱られる……。『こんなところで何してたの！』ってひっぱたかれるかも知れない。けれど私の説明が通じるだろうか。木の下で桜を見ていたらこの子に『ベンチに座ろうよ』って言われたので座って話していました。なんてバカみたいなことが。

普通に考えたってこの時間にうろうろしている私は怪しいんだし。

と頭の中を駆け巡っていた。そして、母親に掛けてやる安堵の言葉のようなものは見つからなかった。

結局、母親は男の子を引っ叩かなかった。昔の親ならまちがいなく一発浴びたところだが……。

この若い母親は不安そうな（どうしてこんなことを……）というような目で子どもを見るだけで、それに対してその場で反省を促がしたりはしなかった。

そういえば、以前、スーパーで目にした光景、母親が三年生位の娘と買い物をしていた。そして「○○ちゃん。申し訳ないけど、カゴ戻しておいてくれる？」とか言っていた。

「申し訳ないけど、だ、私が子どもの時に親からその言葉を使われたという記憶はない。

OL時代でも会社の人から言われた記憶はない。昔の親の言い方は『強制的』でそれが当たり前のことだと思っていた。

「今ってこんな風に対等というか遠慮しているのだろうか。だからこの子も大人びた口調と考え方がこびりついた子どもになってしまったのだろうか。

と思った。

だけど、社会には自分の意思には反して恐ろしいくらい強制的に自分に降り注いでくる問題が山積している。そして、それでもこなしていかなければ自分の生活や生き方やプライドも粉碎されてしまうほどの仕打ちを受けることもままある。

こんなに『対等主義』を発達させてこの子どもたちは『世の中はみんな平等なんだ！ 自分の実力さえあれば対等なんだ！』って思い込んでいざそうではないことに直面した時に耐えられるのだろうか。立ち止まって方向転換できるだろうか。

とこの二人を見てそう思った。

すると、男の子が

「このお姉さんと話してた」

と言ってくれたので私は「はじめまして」と会釈した。

母親も軽く会釈してくれた。

「今まで？」

「そうだよ。お母さんどうしてここがわかったの？」

「学校の先生から……担任の先生から電話が来たから……。捜しに来たの……」

「ああそうなんだ。保健室の先生が担任の先生に言ったんだね」

「そう」

二人のやり取りを訊いてこの母親の「そう」という言い方と、男の子が私に使っていた「そう」という言い方は声の高さ・調子が全く同じであることに気がついた。この子は母親の普通の会話から話し方を真似していたの。

一子どもに『子どもと大人の違い』を教え込んでないんじゃないだろうか。だからこの子はこんなに大人びた話し方しかしないんだ。『大人と話すとき』のルールとかを。

と理解できた。

つつ立っている私に母親は疑わしい眼で眺めることを止めなかった。

それに気がついたのか男の子は

「お母さん。この人怪しくないよ。僕が声かけたんだから」

「えっ。お兄ちゃんが？」

「そう。なんとなく話がしたくてさ」

「話ならお母さんにも出来るでしょ！」

「……出来ないよ。出来ない話もあるんだよ」

と言い放ってしまった。母親の顔にはあきらかに失望の色がにじんだ。そしてそれは怒りに変わったようだった。

「だったらその話は知らない人にならできるの？」

「そう。僕が選んだ人だけだけどね」

「そんな……」

この曇り空のように母親の表情も曇り今にも泣きそうだった。私は

「あのお。本当にベンチでただ話してただけなんです。お母さんが心配するようなことじゃないんです。桜の花がきれいなんですずっと見ていたら声を掛けられたんでなんだろうと思って話してただけなんです」というのが精一杯だった。

母親は少し落ち着いたのか振り向いて桜の木を見た。

「ああ。満開だったんですね」

と言った。

「でしょ？ あの下にずっといたんだ。だから、なにしてるんだろう、って気になってさ。今まで話していたんだ。わかった？」

母親は私のおかしな説明より男の子の話を信用したように見えた。

「お時間取らせてすみませんでした」

と言った。

「いいえ。もっと早く『解散』するべきでした。こちらこそ御心配お掛けしてすみませんでした」と詫びた。

「いいえ。この子普段あんまり手がかからないから、これでいいんだ、って安心してたんですけど」

ど、親に話せないことなんてあったんですねえ」と複雑ながらも理解したようだった。私は「そうみたいです」

と言い、自分の疑いが晴らされたらしいことに胸をなでおろした。

男の子はすかさず

「ねっ、この人が悪いんじゃないでしょ。わかった？ この人は『作家』になるんだよ。今書いているところなんだってさ」と爆弾発言をした。

私は顔から火を噴出しそうだった。母親はそういう人ならこの時間にここにいることも不思議なことではなかったんだとでも思ったのか

「まあそうなんですか。創作の途中で……」

と明るい声になった。

「そうさ。だから桜の花とか眺めてゝ考えてた、んだよね。そうだよ」

「うそだろ！ 散々今まで話に付き合ってたのにこの仕打ち、ありえない……」

これは『助け舟』なんかじゃあない、『因幡の白兎』の背中に塩を塗るようなものだ。

「いや……。まだ、なにも出来てなくて……」

「いいんだよ。大丈夫だよ。なれるよ。話しててわかったし」

「この子お邪魔しませんでしたか……」

「邪魔なんてそんな……わたしこそ話し相手になれたかどうか、自信ないです」

と思考回路は途切れて、しどろもどろだった。

母親の背中で眠っていた妹が一つ伸びをして手足を動かし目を覚ました。

母親はそれに気がつき

「そろそろこれで失礼します。お兄ちゃん行こうか。ありがとうございました」

と丁寧に礼を言うと、男の子と手をつなぎ歩き出した。男の子も

「じゃあ。帰るね。バイバーイ」

と、明るい声で歩いて行った。私は最後はあっけなかったが（やっと終わったか）と心からほっとした。

少し歩いていた二人は立ち止まり男の子は母親に何やら話しかけていた。そして私のところにそして走って戻ってきた。私は

「何！ まだ何か用なの？」

と緊張した。

「お姉さん『名前』なんていうの？」

「はっ？ な、名前？」

「そう。名前。訊いておきたいんだ」

「石ノ山朝子っていうの」

「どんな字書くの？」

字を説明してもわからないと思ったので私は持っていた名刺を探し出して渡した。

「ゝ石、とゝノ、ゝ山、ゝ朝子、か……。お姉さんも難しくない名前だね」

「そう」

「わかった。これ大事にするよ。ありがとね」

と言い母親のところへ戻ろうと何歩か進みかけた。

私はとっさに思いつき男の子に向かって叫んだ。

「ねえ。あのさあ。今日のこと私の『ブログ』に書いていい？」

「えっ。『ブログ』持ってるの？」

「うん。君の名前は出さないから `I くん、ってことでどうかな……」

男の子は一瞬考えた風だった。そして

「いいよ。別に。名前出しても `いちろうくん、てさ」

「いいの？ `いちろうくん、って出しても？」

「いいよ。そんなことにこだわることってきっと大事なことじゃないんだよ。きつとさ。お姉さん と話しててそんな気がしてきた」

とまた大人びた口調で言った。

「ふーん。わかってくれたんだ」

「 `わかった、って感じじゃないんだけど。少しだけね。お母さんが `いちろう、って叫んでここにきてくれたとき、さっきさ。うれしかったし」

と初めて子どもらしい顔で笑った。

「そっか。わかった。じゃあ書かせてもらうね。名刺にブログのアドレス書いてあるから読んでよ ね」

「わかった。そうする。お父さんのパソコンだから読めない字はお父さんに読んでもらう。

かっこよくていいの書いてよね」

「わかった。がんばるよ。もう行ったら？ お母さん待たせちゃ悪いよ」

「うん。じゃあね。ばいばい」

と男の子は何度も振り向き母親とつないでいない方の手を振り振り去っていった。

「最後までプレッシャーだなあ。 `かっこよくていいもの書いて、かあ」

そして、心の中で思った。（一郎君。この桜の木は来年もきっと咲くよ……）と。

僕はお母さんと手をつないで歩いた。お母さんの手は少し冷たくなっていたので僕の手で暖めてあげた。

僕が何度振り向いてもあのお姉さんはまだそこにベンチのところにいた。

桜の木の下で花を眺めていた時みたいにうれしそうにニコニコしながら……。

急に風が強くなった。僕は貰った名刺を風に飛ばされないようにしっかりと持った。

さっきより強い風が一つ吹いた。僕が振り向くと桜の花がテレビで見たことのある竜巻みたいにぐるぐるになっていた。お姉さんの姿は見えなくなっていた。僕は思ったんだ。

—お姉さん。今日ここで見た桜の花はきれいだったよ。また会えるといいなー。

ってね。